

カメルーン共和国東南部「バクエレ」の妖術

平成 20 年度入学

参加したフィールドスクール：カメルーン・フィールドスクール

調査地：カメルーン共和国

山口 亮太

キーワード：妖術，伝統宗教，民族医療，開発

自分の研究テーマについて

カメルーン東部州のコンゴ共和国との国境沿いにバクエレと呼ばれる人々が居住している。彼らはバントゥー系の農耕民で、ガボン北部やコンゴ共和国北部から川沿いに東へと移動してきたと言われている。彼らの概念の一つにエリエーブ (*elieeb*) と呼ばれるものがある。これは一般に人類学で言われる「妖術」という概念に近い。

例えば、バクエレと同じ言語系統に属するカメルーン南部の住民マカの調査を行っているゲシーレは、*djambe* と呼ばれる概念について言及している (Geschiere, 1997)。*djambe* は人間の腹の中に存在し、その持ち主に様々なことを行う力を与える。それは他人を害するような働きをする一方で、権威者や成功者であれば必ず持っていると考えられ、人類学的な意味での妖術や邪術といった概念に収まらない両義的な意味合いを持っている。

バクエレの *elieeb* の場合も、やはり人間の体内に存在する何かで、持ち主に様々な力を授ける。多くの場合にステレオタイプ的に語られるのは、「人を食べる」というように言われる *elieeb* である。これは持ち主に対して親族の命を要求するものである。また、呪医 (*gaa*) も *elieeb* を持っている。

現在は、このような *elieeb* が具体的な形であられる領域の一つである病を見ることによって妖術から見た民族医療分野への接続を試みている。

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールで最も印象に残ったのはジャー・リザーブへ行ったときのことであった。リザーブ内に入ってすぐにバカたちが待ち構えていた。しかし、その姿は私が東南部のフィールドで見慣れた姿とはどことなく違っていた。こちらの人数がそろそろ少し林の中に入ったところに少し拓けた場所があり、そこでバカのダンスを見ることになった。フィールドスクールの参加者たちは、少し圧倒されながらも熱心に写真を撮ったりビデオをまわしたりしていた。しかし、私はやはり何か違和感があった。ダンスには歌が付きものだが、その歌が何か聞き慣



写真1 バカのダンス (?)

れたものとは異なっている気がする。そう思って見てみると、服装も何とつかいかにかにもそろっており、まるで衣装というかユニフォームのようである。これはおそらく、一種の観光用のパフォーマンスとして行っているのだろう。私の通う東南部のフィールドは観光開発が進んでおらず旅行者がほとんど訪れないため、このような様子は見たことがなかった。



写真2 まるで衣装のよう？



写真3 フンバンの王宮兼博物館

また、一度も行ったことのない西部州へ行くことができたのも良い経験となった。西部はイスラム王国が林立し、東部の熱帯雨林地帯とは大きく文化が異なる。特にフンバンではイスラム王国全体で観光に力を入れているのが大変興味深かった。

私の調査村があるカメルーン東南部はカメルーンの中でも特に開発が進んでいない地域であると揶揄されることが多いのだが（単に「森の中に住んでいる」と言われたりする）、それがどういう感覚なのかカメルーン国内の他地域を見たことによって納得することができた。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

上記のように、フィールドスクールでは開発について思案することが多かった。東南部では開発と言えば伐採会社の動向が重要な位置を占めている。私の調査する地域でも、伐採会社が操業を開始するために、道路の整備や資材の提供など様々な社会貢献を行いはじめている。これをめぐって村々が（というよりも各村の有力者たちが）様々な駆け引きを陰に日向に行っている。例えば、道路整備の重機が故障して作業が一ヶ月以上停滞した際には、誰が重機を妖術で止めたのかということで大問題になり、各村の村長が一同に会して議論を行われたことがあった。この時は町から近い村々を奥地の村々が妖術告発するという事態に陥った。ことの顛末を最後まで見届けることはできなかったが、今後も開発と妖術については注意深く観察し、議論を深めていく必要があると考えている。

参考文献

Geschiere, P. 1997. *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*. Charlottesville: University Press of Virginia.